

# 『瑜伽論』における相続性について

太 田 久 紀

## (一)

法相宗研究の一端として、その思想の中の衆生性の大切な要素である相続性について『瑜伽論』を資料として考えてみたいと思う。

人間は、非常非断のものとか、恒転のものとか、刹那生滅のものとか、非相続の相続のものとかいわれるような形で存在するものであるが、その一面であり衆生相としてはきわめて重要な性質である常性、恒性、相続性などといわれる部面は『瑜伽論』の中に、どのように説かれているのであろうか。

『瑜伽論』では、そうした相続性の一面を、(一)業説と、(二)心意識説という二つの方面から捉えているといつてよいであろう。前者は、業相続説といわれるものであり、後者は、相続心識説と一般にいわれるものである。もちろんこの二つが、内的に結びつけられるのが瑜伽派の使命であったわけであるが、『瑜伽論』では業相続説という形で有相続性の傾向の方が強いように思われる。

## (二)

まず、業は造作の義といわれるように、人間の行為のすべてをいい、人間を時間的連続の面から捉えようとする古い思想である。

しかし、直接的に連続性の面から人間を捉えようとすることは、そこに有的な一つの統一体の連続を思わせるものがあり、空、無我を根本とする仏教にとって微妙な関係が生まれてくる。仏教において、業の思想が、どのような位置に、いつおかれたのかは難しい問題であるが、部派の時代に中心のテーマの一つとして盛んにとり扱われたことは『俱舍論』に窺うことができる。しかし『俱舍論』で説かれる業がかなり有的な性格のものであることは周知の通りであり、あらためてそれを空、無我の上に定置する必要があった。中観派の歴史的必然性がそこにあった。すなわち『中論』『観業品』で、常的な業説は、不常断のものとして空説によって捉えなおされるのである。瑜伽派は、その後をうけて展開するのであるが、そこには二つ問題が課せられていた。一は、相続のもの

をそのまま直接的に有的な相続としないで、『中論』で深められた空、無我による基礎づけを継承することであり、二は、相続の依止となるものを体系化することであつた。

一は、非常非断の常として、常を捉えることによって空説を継承する。『成唯識論』で阿頼耶識の常非常を論じて「非常非断」<sup>(1)</sup>となし、頤の恒転を釈して、恒を「此の識は無始の時より来、一類に相続して常に間断すること無し」<sup>(2)</sup>となし、転を「此の識は、無始の時より来、念念に生滅して前後変異す」<sup>(3)</sup>となしており、又種子説においてもその六義の第一に、刹那滅を挙げて「此は常法を遮す」<sup>(4)</sup>と述べながら、第三には恒随転を挙げ、「一類相続」<sup>(5)</sup>を説いて、二つの矛盾した性質を一つの種子の上に考えようとしている。これらの捉え方は、相続を非相続の相続という空説のものとしないうえぬことである。

二は、相続の依止たるものの体系化であるが、これこそが瑜伽派に課せられた問題であつた。業相続の依止となるものは、上座部の有分識、有部の四阿頼耶、犢子部の非即非離蘊我、化地部の窮生死蘊、経量部の細意識などという形で探究されたと法相宗で述べていることは周知の通りである。瑜伽派はこれらの伝統をうけついで、心意識説を組織し、阿頼耶識思想としてそれを大成するわけである。瑜伽派において、相続性は非常非断の常であり、その非常非断の依止たるものとして阿頼耶識が説かれることによって、相続性と、空、無我との関係という課せられた使命がそこに止揚され解決されようとしたのであつた。その意味において、瑜伽派の完成した心意識説——阿頼耶識説は重要な位置を占めるものであつた。

このように、相続性は、素朴な有的な相続性が空、無我の竜門をくぐる

ことによって、非常非断の人間の深い把握として蘇生するわけであるが、しかも『瑜伽論』においては、依然として有的な相続性への傾斜が強くみられる。それは各所に説かれる業説にもみられるところであるし、それを超克して説かれている筈の心意識説にも窺うことができるのである。

### (三)

まず、(一)業相続説といわれる古い直接的有的な業の説かれているものからみていきたい。

それは、非常に素朴な相続説で、輪廻転生という形で説かれるものであり、論の中には、所々にこれがみられる。もちろん後でみるような心意識説としても相続性は説かれ、また計我論、計常論などの破という形で直接的相続性が否定されるのであるが(巻七)、しかも有的な業相続説が実に多くみられるのである。しかし内容的には同一のものが多いため、その中の幾つかを挙げてみると次のようなものがある。

- 1 業に随つて有情此に於て生を受け、余趣に生ず。<sup>(6)</sup>
- 2 種々の因縁に由つて、長時に苦を受く、乃至先世に造る所の一切の悪不善の業、未だ尽きず未だ出でざるが故なり。<sup>(7)</sup>
- 3 宿世の貪欲の法を串習せるが故に、今世に貪欲は性と為つて猛利なり。<sup>(8)</sup>
- 4 彼、宿世の妙善なる因力に任持せらるるに由るが故に、若は暫く善説法の毗奈耶の少分の功德を讃美するを聞き、或は全く聞かず、暫く少しく聞き、或は全く未だ聞かずと雖も、能く速疾に信解し、趣入し、愛樂し、修行し、或は出家を求め、既に出家し已て畢竟趣入し終に退転無

し。<sup>(9)</sup>  
……

5 族姓、色力、寿量、資具等の果を生ずるに於ては、即ち、淨、不淨業を最勝の因と爲す。<sup>(10)</sup>

6 諸の有情、業増上の故に、六処を具足して生じ、或は復た具せざるあり。<sup>(11)</sup>

これらに説かれているのは、あきらかに輪廻転生の考え方の上のものといつてよいであろう。1は業に随つて有情が生をうけ、又他の生をうけるといふもの、2は惡不善の業がまだ尽きないので、生死輪廻の苦が相續しつづけるというもので、生から生へという相續が業によつて捉えられたものであり、3・4は精神内容的なもの、5・6は、人間の身体及びそれを取りまく物質的環境のすべてのものが、業によつて決定されているとするものである。この場合、3の貪欲性とか、4の善説法を信解し、出家し畢竟趣入して退轉なくある性とかは、いわば、宗教的素質に関するものであり、これを、過去の業、宿世の業の果として内面のつながりにおいて受取ることとは容易に理解される。『瑜伽論』は、瑜伽行上の心境の進展を体系的に順を追つて説くものであるから、その修行の上でぶつかる貪欲性とか無漏性とかを業果としてうけとめようとすることは、業説の伝統をつぐ『瑜伽論』にとつて自然のことであつたといふのであろう。それに対して、ひろい意味での1を含めての5、6は、そうした内面性、宗教性の問題ではない。族姓、色力、寿量、資具、六処の具不具などの、いわば宿命的身体的なものや、環境的物質的なものであり、それらまでが、宿世の淨、不淨業によつてきまるとされているのである。これは、人生のすべてを業説で把握しようとすることであり、そこにある

宿世の業と現世の果との間を結ぶものは、空における相續の如く、屈折を経て深められた相續性というような性質のものではなく、きわめて有的直接的相續を思わせるものである。空説を通過しながら、しかもそれ以前の素朴な業説がそのまま繼承されているのである。

#### (四)

(Ⅱ)は、相續性が心識説として深められた形で説かれるものである。つまり(Ⅰ)が直接的な相續の傾向が非常に強いのに對して、これは本質的に剎那生滅のものである識において、空として基礎づけをされながら相續が説かれるものである。空を基礎とするという意味において、當然、非常非斷の常と説かれる性質のものであり、後の瑜伽派の相續の基底となるものである。しかるに、論に説かれる心識説は、ここにまたかなり有的な性格のものとして説かれているのである。

前にも述べた通り、心識説は、業相續の依止として探求されるものであり『瑜伽論』では種子、熏習、阿頼耶識説として展開されている。

阿頼耶識説がまとまつて説かれているのは次の三カ所である。すなわち、(1)「本地分中意地第二」(一卷)(2)「撰決分中五識身相応地意地の一」(五一卷)(3)「撰決分中菩薩地の五」(七六卷)である。(3)はいうまでもなく、『解深密經』「心意識相品」に當る部分である。

まず(1)では次のように説かれている。

○云何が意の自性なりや。謂く、心意識なり。心とは謂く、一切種子の随依止する所の性、随依附依止する所の性にして、体能く執受し異熟に攝めらるる阿頼耶識なり。<sup>(12)</sup>

○彼の所依とは、等無間依は謂く意なり。種子依は謂く前に説けるが如き一切

種子阿頼耶識なり。<sup>(13)</sup>

○中有の種子転ずる者は、便ち余類の中に於て生ず。<sup>(14)</sup>

○最後に決定して、各々一滴の濃厚の精血を出す。二滴和合して母胎の中に住し、合して一段と為す。猶し、熟乳凝結の時の如し。当に此の処に於て一切種子異熟に摂められ、執受の所依たる阿頼耶識和合し依託するなり。<sup>(15)</sup>

○一切種子識の功能に由るが故に、余の微細の根及び大種ありて和合して生ず。<sup>(16)</sup>

○又此の羯羅藍は識の最初に託する処なれば即ち肉心と名く。<sup>(17)</sup>

○此の一切種子識は、若くは般涅槃法<sup>(18)</sup>のものは一切種子皆悉く具足す。不般涅槃法<sup>(18)</sup>のものは、便ち三種菩提の種子を闕く。

○種子の体は無始の時より来、相續して絶えず、性無始より之れありと雖も、然かも、淨、不淨業の差別に因つて熏発す。<sup>(19)</sup>

○諸の種子の与果せざるものは、或は順生に受け、或は順後に受く。百千劫を経と雖も自ら種子より一切の自体復た円満して生ず。<sup>(20)</sup>

○諸の種子は乃ち多種差別の名あり。所謂、界と名け、種姓と名け、自性と名け、因と名け、薩迦耶と名け、戲論と名け、阿頼耶と名け……<sup>(21)</sup>

○転依を得たる淨行者は、一切染淨法の種子の所依を転捨し、一切善無記の種子に於て転じて縁をして闕せしめ転じて内縁自在なるを得。<sup>(22)</sup>

これらに説かれているのは、まず、種子が有的に捉えられているという事、そして、その種子が輪廻の因となること、その種子が熏ぜられる依止所が阿頼耶識、一切種子識であるということである。種子は、無始時来、相續して、絶えないものであり、百千万劫も維持されて、機縁に触れば果を円満するものであるとされているのである。この間、阿頼耶識の刹那生滅も、種子の刹那滅も一度も説かれていないのである。

この本地分の心識説は、『瑜伽論』の冒頭に説かれるものであり、論はこの心識説の上に展開されるといつてよく、前に述べた業説も、この心識説を基盤として説かれるのであるから、これが非常に有的であると

いうことは、論全体の相続性の性格を決めるものとして注意されてよいであろう。

(2)の「摂決択分中五識身相応地意地」は、(1)の釈として、阿頼耶識の存在の八証、その流転相、その還滅相、六識との成不成の四項目を並べて、論中、最も詳しく心識を論述するところであるが、ここでは恒相続とともに、転という性質を並べ説いているのがさきと異るところである。「本地分」中の有的阿頼耶識が深められ、空の有として組織されているといつてよいであろう。

まず、有名な「阿陀那識は甚深なり云々」という頌が挙げられ、次いで、阿頼耶識の存在を証明するいわゆる瑜伽八証が説かれる。すなわち八種の相に由つて阿頼耶識決定して是れあるを証す。謂く若し阿頼耶識を離れては、依止執受すること道理に<sup>1</sup>應せず。最初に生起すること道理に<sup>2</sup>應せず。明了性あること道理に<sup>3</sup>應せず。種子性あること道理に<sup>4</sup>應せず。業用の差別道理に<sup>5</sup>應せず。身受の差別道理に<sup>6</sup>應せず。無心定に処すること道理に<sup>7</sup>應せず。命終の時の識は道理に<sup>8</sup>應せず。<sup>(23)</sup>

である。これについては、すでに宇井博士や結城博士が中国での議論も含めて詳細に論じておられるので、今ここでいちいち当ることはしないが、この八証によつて論証される阿頼耶識は、間断ある六識に対して、恒相続の執受性のものとして説かれていゝといつてよいであろう。しかしこの「摂決択分」では、恒性と並んで流転相としてその転性非常性が説かれており、「本地分」でみられなかった識の生滅性の上の相続性が深くほり下げて捉えなおされているといえる。たとえば、転性について次のようにくりかえし述べられているのである。

○阿頼耶識の四種の相に由つて流転を建立す。……云何が四相に由つて建立す

るや。当に知るべし。所縁によりて転ずるを建立するが故に。相応して転ずるを建立するが故に。互に縁性と為りて転ずるを建立するが故に。識等俱転して転ずるを建立するが故に。<sup>(25)</sup>

○阿頼耶識は所縁の境に於て念々に生滅す。当に知るべし。刹那相続流転して一ならずと。<sup>(26)</sup>

○極めて微細に転じて相応するが故に。<sup>(27)</sup>

○阿頼耶識は諸の転識の与めに互に縁性と為りて転ず。<sup>(28)</sup>

○阿頼耶識は或は一時に於て苦受、楽受、不苦不楽受と俱時に転ず。<sup>(29)</sup>

○阿頼耶識は、或は一時に於て転識と相応する善、不善、無記の心法と俱時に転ず。<sup>(30)</sup>

このように、流転相として、刹那相続流転のものであり、微細転のものであるとされて、非相続の相続として説かれるのであるが、「本地分」では、こういう転性刹那生滅性は説かれることはなかった。つまりここで、常、相続が、非常非断の常という形に深められているのであって、この一段の阿頼耶識が、後、法相宗阿頼耶識説の基盤として重視されるようになるのは至当のことであった。

(3)は「撰決摂分菩薩地の五」に説かれる阿頼耶識である。いうまでもなく、これは『解深密経』『心意識相品』と同じものである。『深密』『瑜伽』の關係は又一つの大きな問題であるが、今はそれにはふれないで、『瑜伽論』『撰決摂分菩薩地』としてのみ考え、その中の阿頼耶識をみると、ここに説かれる阿頼耶識の性質は、再び有的相続的ものとなっているのである。

1 広慧よ、当に知るべし。六趣の生死に於て彼彼の有情衆の中に墮し、或は卵生に在り、或は胎生に在り、或は湿生に在り、或は化生に在りて身分生起す。中に於て最初に一切の種子の意識成熟して展転和合し、増長広大して二の執受に依る。一には有色の諸根と及び所依との執受、二には相名分別の言

説戲論の習気の執受なり。<sup>(31)</sup>

2 広慧よ、比の識も亦、阿陀那識と名く。何を以ての故に。比の識は身に於て随逐し執持するに由るが故に。<sup>(32)</sup>

3 亦阿頼耶識と名く。何を以ての故に。比の識は身に於て摂受し、藏隠して安危を同じくする義に由るが故に。<sup>(33)</sup>

といわれ、このあと、六識との關係で有名な暴流の譬喩が述べられ、六識を浪に、阿陀那識を恒相続の流れに比し、その縁現前に従って、一識乃至六識が転ずると説かれているのであるが、その場合、間断の六識と、相続の阿陀那識の關係を説くのが主であって、阿陀那識自体の恒性、転性の問題は論究されていない。それに関連のあるのは、ここにあげた1・2・3のところであろう。

このうち2は、阿陀那識であり、身に於て随逐執受するもの、は阿頼耶識であって身に於て、摂受し、藏隠されるものとして説かれている。両者に共通のしかも大切な性質は身が主でさりと、身に執持され、身に藏隠されるといふ身に対して従的な形で説かれているということである。

阿頼耶識は身の中にあるものということであり、『成唯識論』などで説かれる阿頼耶識説とは根本的に異った性質のものである。阿頼耶識説としては非常に有的な性格であり、原初的なものといつてよいであろう。

これを頭において、1を読むと、そこに説かれている識が「本地分」のものと同じような有的相続的なものであることが、さらにはっきりとしてくる。四生のいずれであれ、六趣の生死において有情の中に墮すという表わし方はそれが有的であるとともに、輪廻転生のものとしての性質の強いことを意味している。結城博士は、ここで説かれる本識は、種子識としてのものであること、そして三世兩重説の上で解釈するのが親

しいと述べておられるが、<sup>(34)</sup>「本地分」の阿頼耶識説とにらみあわせて、  
そう解釈するのが順当であろう。

もっとも、論は、このように有的に心意識義を述べたあと、

諸の菩薩内に於て、各別に実の如く阿陀那を見ず、阿陀那識を見ず、阿頼耶  
を見ず、阿頼耶識を見ず、積集を見ず、心を見ず、眼色及び眼識を見ず、耳  
声及び耳識を見ず、鼻香及び鼻識を見ず、身触及び身識を見ず、意法及び意  
識を見ず、是れを勝義善巧菩薩と名く。<sup>(35)</sup>

と、心意識相を超えたところが、心意識に善巧なるものとしている。この  
ことは、心意識は心意識で有として説いた上で、しかもそれが空を基盤  
とするものであることをいわんとするものであることは論を俟たない。

徳竜が『解深密経講讃』四で、「心意識相品ハ、勝義諦力上ノ後得ノ妙境  
ヲ開クナリ」<sup>(36)</sup>と述べているのは、ここでの心意識を根本的には空と把握  
すべきであることを指摘したものである。しかしここでは、識は識とし  
てきわめて有的に説いたあとで、それは空であるとするのであって、空  
と有とが相入貫通して空の有と深められてはいないといってよいであろ  
う。換言すれば、有と空とが別々に定置されて、その上で両者は一であ  
ると、空の方に攝取される形をとって統合されているのである。有が空  
に包摂されながらも、識自体としてはきわめて有的相続的傾向が強いと  
いわなければならない。

これが『撰論』や『成唯識論』になると、有は、空の上の有ではな  
く、空の有として深められてくる。阿頼耶識は非常非断であり、恒、転  
である。そして業は、習気としてその非常非断の識に熏ぜられるもので  
あり、従って業自体も非常非断のものと捉えなおされる。理世俗の立場  
に立ち、瑜伽派の系譜の中では最も有的と思われる『成唯識論』も、

『瑜伽論』の相続性に比べると、はるかに完全に空説に立脚しているこ  
とがわかるのである。

#### (五)

『瑜伽論』一〇〇巻に比して引用したものがあまりにも少ないようであ  
るが、特に(1)は同一内容のもののかえしが多く、そこに説かれる  
相続性は大体以上のものであるといつてよいであろう。全体としてみた  
場合、業説はもちろんのこと、空の上にたてられるべき心意識説におい  
ても有的相続性の傾向が強く、空、非常非断としての性格が少ないとい  
うるのである。

しかし、『瑜伽論』に説かれるこのような相続性は、教相として素朴  
で原初的であるといえるとしても、それにはその非常に重要な意味が  
ひそんでいるように思う。相続性が瑜伽系では心識説として深められて  
いきながら、しかも、直接的有的相続としての業説が長く継承されるば  
かりでなく、心識説においても相続性が強くあらわれているのには、教会  
の社会的歴史的事情や思想的意味での限界もあるのであらうが、それ  
とはまた別にそれ相応の理由があると思われるのである。そしてそれが、  
『瑜伽論』の意味を重からしめるものと思うのである。

さてそれは、瑜伽行の修行がその障礙として自覚されたものを、有的相  
続性のものと受取らせたのであらうということである。いうまでもなく、  
『瑜伽論』は『十七地論』ともいわれるように、瑜伽行の進展を十七地  
に分けてその心境の深まりを順をおって述べた論典であり、後の法相宗  
にみられ易い法相分別を本命とするものではない。どこまでも瑜伽行の

裏づけにおいてその修行の情熱をうけとるべき論典である。もちろん、相続性——業、心識説も瑜伽行の体験を抜きにして考えることはできず、論中には、その間の様子が次のように述べられている。

○初めて業を修むる者は、相応する所縁の境界に於て、加行を勤修すと雖も、而も諸蓋数々現行し、身心の纏重あり、是の因縁に由りて心をして速疾に定を得せしむること能わず……<sup>(37)</sup>

○初めて業を修むる者は、始めて業を修むる時、最初に全く所縁の境に於てその心を繫縛せず、或は不浄に於て、或は復た余処に於て、唯、是の念を作さく。わが心云何にして散乱無く、相無く、分別無く、寂靜極寂靜にして転ずること無く、動ずることなく、希望する所無く、諸の作用を離れて内に於て適悦することを得んと。<sup>(38)</sup>

ここにいう業は、生死相続の業ではなく、加行勤修の無漏業であるが、その加行の最初の刹那に、身心を散乱せしめるものが自覚され、それを内面の問題として対決していることを述べて、修行の障礙となるものが、加行の無漏業と深く相関して捉えられたものであることを示している。さらに、

○便ち是の念を作さく。我昔より以来、身語意に依って造る所の諸業は、唯罪のみにして福に非ず。若しその趣の諸の造惡の者にその中に生ずべきあらば、我今定んで往かんと。是の如く悔い已って尋いで即ち命を捨て已って業の差別に随って諸の惡趣を生ず。謂く那落迦、旁生、餓鬼なり。<sup>(39)</sup>

とあり、瑜伽行上の省察によって自覚される場合、業がすべて罪、非福のものとしてであること、それを悔い命を捨ててもなお且つ、厳然と続く業の力によって惡趣に生まれるということさえが述べられている。

『瑜伽論』が、瑜伽の修行をぬきにしては考えられないことを端的に示

していることがよく窺われるところである。

しかして、修行上の障礙の体験は、それが深ければ深だけ相続性として自覚されるのである。衆生性の特徴は、生死相続とか六道輪廻とかの語に象徴的にみられるように相続性ということにある。衆生性は、自己の内面にある惑とか二執とかいわれるものが根深いという体験とともに、それよりも強く、それが昨日もあり、今日もあり続けるという相続としての自覚として捉えられるであろう。そしてその相続の自覚が深ければ深だけ、相続するものが有的にうけとられ強い力を持つものとなるであろう。自己の内的な障礙も外的な障害も、相続する有的なものの果として考えられるようになるのである。妙果の世界よりみれば、それは刹那生滅、流転相続、非常非断、仮空のものである。しかし、瑜伽行の上で体験されるときは透徹せる空のものではなく、それ以前のものとして有的に迫ってくるのである。『瑜伽論』の相続性が空觀を通過し、相続流転の心識説を持ちながら、なおかつ有的な性質を強く留めているのはこのように瑜伽行上の体験としてうけとることによって理解することができる。業説が空、無我の仏教としては微妙な問題を含んでいるにも拘わらず長く継承されるのには、真摯な修行の体験が裏づけとなっているということができようであろう。

組織体系としては『成唯識論』にはるかに及ばない『瑜伽論』が、『深密』『瑜伽』と併称されて法相宗で尊重されるのは、法相の素材がこの中にあるということもさることながら、最も本質的な瑜伽行の体験が率直に説かれているという点にあるといえるであろう。そして『瑜伽論』中にみられる有的な相続の業説や、相続としての心識説は、そういう

註1新導成唯識論 第三・八

註22 大正藏經・三〇・二八四・下

2  
"  
"  
•  
八

23  
五七九・上

3  
//  
//  
•  
八

24 宇井伯寿博士、瑜伽論研究、第十

第二・二

四、結城令聞博士、心意識論より

第二・二

見たる唯識思想史、第三編第四章

大正蔵經・三〇・二六八

5 大正藏經・三〇・五七九・下

[illegible]

26 2  
上  
肩  
結  
三  
五  
一

三	二
八	九
〇	五

五	五
八	八
〇	〇
口	上

三	八
二	九
一	〇

二五〇  
中

四〇一

五八〇・下

10  
18  
24

29  
五八〇・下

11  
"  
"  
二八八

30  
〃  
〃  
五八〇・下

12  
〃  
〃  
二八〇

31  
〃  
〃  
七一八・上

13  
〃  
〃  
二八〇

32  
〃  
〃  
七一八・上

14  
"  
"  
二八二

33  
〃  
〃  
七一八・上

15  
"  
"  
二  
八  
三

34 結城博士前掲書第二編第四章

16  
二  
八  
三

35 大正藏經・三〇・七一八・中

77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100  
101  
102  
103  
104  
105  
106  
107  
108  
109  
110  
111  
112  
113  
114  
115  
116  
117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166  
167  
168  
169  
170  
171  
172  
173  
174  
175  
176  
177  
178  
179  
180  
181  
182  
183  
184  
185  
186  
187  
188  
189  
190  
191  
192  
193  
194  
195  
196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566  
567  
568  
569  
570  
571  
572  
573  
574  
575  
576  
577  
578  
579  
580  
581  
582  
583  
584  
585  
586  
587  
588  
589  
590  
591  
592  
593  
594  
595  
596  
597  
598  
599  
600  
601  
602  
603  
604  
605  
606  
607  
608  
609  
610  
611  
612  
613  
614  
615  
616  
617  
618  
619  
620  
621  
622  
623  
624  
625  
626  
627  
628  
629  
630  
631  
632  
633  
634  
635  
636  
637  
638  
639  
640  
641  
642  
643  
644  
645  
646  
647  
648  
649  
650  
651  
652  
653  
654  
655  
656  
657  
658  
659  
660  
661  
662  
663  
664  
665  
666  
667  
668  
669  
670  
671  
672  
673  
674  
675  
676  
677  
678  
679  
680  
681  
682  
683  
684  
685  
686  
687  
688  
689  
690  
691  
692  
693  
694  
695  
696  
697  
698  
699  
700  
701  
702  
703  
704  
705  
706  
707  
708  
709  
710  
711  
712  
713  
714  
715  
716  
717  
718  
719  
720  
721  
722  
723  
724  
725  
726  
727  
728  
729  
730  
731  
732  
733  
734  
735  
736  
737  
738  
739  
740  
741  
742  
743  
744  
745  
746  
747  
748  
749  
750  
751  
752  
753  
754  
755  
756  
757  
758  
759  
760  
761  
762  
763  
764  
765  
766  
767  
768  
769  
770  
771  
772  
773  
774  
775  
776  
777  
778  
779  
780  
781  
782  
783  
784  
785  
786  
787  
788  
789  
790  
791  
792  
793  
794  
795  
796  
797  
798  
799  
800  
801  
802  
803  
804  
805  
806  
807  
808  
809  
810  
811  
812  
813  
814  
815  
816  
817  
818  
819  
820  
821  
822  
823  
824  
825  
826  
827  
828  
829  
830  
831  
832  
833  
834  
835  
836  
837  
838  
839  
840  
841  
842  
843  
844  
845  
846  
847  
848  
849  
850  
851  
852  
853  
854  
855  
856  
857  
858  
859  
860  
861  
862  
863  
864  
865  
866  
867  
868  
869  
870  
871  
872  
873  
874  
875  
876  
877  
878  
879  
880  
881  
882  
883  
884  
885  
886  
887  
888  
889  
890  
891  
892  
893  
894  
895  
896  
897  
898  
899  
90

66 日本大藏經・方等部章疏六・一

8	1
8	1
二八四	二八三

3 日 不 庸 給 一 等 音 章 政 不 一

9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

3 大正蔵經・三〇・四五五・下

[illegible]

四五六・下

20  
二  
八  
四

四〇九・上

21  
二  
八  
四